

岩手医科大学歯学会第37回例会抄録

日時：平成6年2月26日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部4階講堂

演題1. わが国における舌癌剖検症例の検討
—日本病理剖検輯報による1990年度の集計—

○佐藤 方信, 佐藤 泰生, 藤井 佳人

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

わが国の舌癌の実態解明を目的に日本病理剖検輯報第33輯から収集した1990年度の舌癌剖検症例について種々の観点から検討した結果を報告した。

この年度の舌癌剖検数（剖検時平均年齢）は男59例（64.8 ± 12.2歳）、女31例（64.9 ± 12.9歳）、合計90例（64.8 ± 12.4歳）であり、これらの出所（兼科1例）では耳鼻科が24例（64.4 ± 10.0歳）、内科が22例（68.5 ± 10.1歳）、口腔外科が17例（59.6 ± 14.1歳）、放射線科が11例（70.5 ± 12.5歳）、頭頸科が10例（63.9 ± 13.8歳）、外科3例、その他3例、不明1例であった。剖検時年齢では60歳代が28例、70歳代が27例、50歳代が15例、80歳代が9例、40歳代が8例と続いていた。組織学的（記載なし8例）には扁平上皮癌が81例（扁平上皮癌60例、高分化型扁平上皮癌14例、角化型扁平上皮癌1例、中分化型扁平上皮癌6例）、悪性黒色腫が1例であった。舌癌（扁平上皮癌）の発生部位（不明9例、記載なし67例）では舌（側）縁部7例、舌根（後）部6例、舌尖1例であり、左右別（記載なし71例）では左側12例、右側7例で、左側が多かった。舌癌に他臓器の癌を重複した多重癌が30例みられた。その内、二重癌の組合せでは舌と歯肉、胃および肺との重複が各々3例で、舌と肝、および脾との重複が各々2例で、舌と喉頭、甲状腺、食道、直腸、回腸、腎、および血液との重複が各々1例であった。三重癌では舌と、歯肉と食道、口底と咽頭、食道と咽頭、食道と喉頭、肺と胃、肺と乳腺、肺と甲状腺、肺と食道、および腎と子宮が各々1例であった。四重癌は舌と肺、直腸および前立腺と重複した1例であった。死因となった副病変では肺の感染症が18例と最も多く、肺のうっ血水腫、敗血症、肝硬変が各々2例で、肺出血、DIC、頸部血管破綻、口腔内再発部出血、喉頭浮腫、腫瘍による気管狭窄、腎腫瘍、胃潰瘍、

蜘蛛膜下出血、脳浮腫、全身播種性結核が各々1例であった。

演題2. 岩手医科大学歯学部附属病院における全身麻酔症例の検討

—最近3年間の統計的観察—

○城 茂治, 杉村 光隆, 久慈 昭慶
佐藤 雅仁, 鹿内 理香, 佐藤 健一
佐藤 裕, 佐野 滋子

岩手医科大学歯学部歯科麻酔学講座

本学歯科麻酔科の外来部門が開設された平成2年4月から平成6年2月20日までのおおよそ3年11カ月の間に受診した患者380名について集計し、このうち特に全身麻酔下で処置が行われた105名について検討した。

1. 380名中、障害者総数90名、リスク患者総数235名、ペイン患者54名であった。患者の数はいずれも年々増加の傾向にあった。
2. 全身麻酔下で処置が行われた患者総数は105名で、経年的に増加する傾向にあった。
3. 全身麻酔症例の年齢構成では、6才から15才までの患者数が最も多く、次いで16才以上であった。
4. 全身麻酔の適応となった合併症を見ると、精神遅滞を合併した患者が最も多かった。この障害のある患者の意識下での処置が困難なことが伺えた。
5. 処置内容では、歯科治療が最も多かった。
6. 全身麻酔薬としては、平成2年の後半からセボフルランが広く用いられるようになり、現在も最も多く用いられている。これは比較的麻酔の導入、覚醒が速やかで、外来での全身麻酔に適しているためと考えられる。
7. 気管内チューブの挿入経路としては、経鼻的挿入法が最も多かった。これは処置内容が歯科治療が主であるため術野の確保には最も適しているためであろう。
8. 麻酔時間は3時間未満の者が最も多く、次いで4

時間未満で、この両者で74%を占めた。外来での全身麻酔であるため処置内容が比較的短時間で終わるものが多かった。

以上、岩手医科大学歯学部歯科麻酔科外来患者の集計より得た結果について報告した。今後障害者歯科、インプラント診療などの充実により外来での全身麻酔症例はさらに増加するものと思われる。歯科麻酔科としても、これに十分対応できる万全の体制を確立する必要性を認識した。